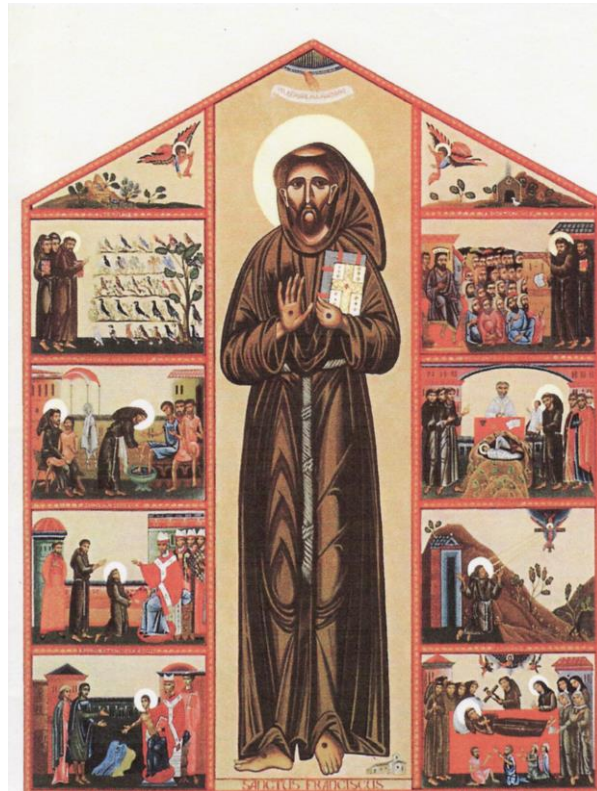


聖ヨハネ・パウロ II 世

# 詩編について

## 第三卷

### ・ 第3週 朝の祈り



聖職者が聖務日課を、声の旋律にではなく、心の調和に注意しつつ、神の御前で敬虔に唱えて、声は心に、心は神に一致するようにし、声の柔らかさで人々の耳を楽しませることではなく、心の清さで神の聖心にかなうことができるように、取り計らってください。私は、以上のことを、神が私に恵みを与えてくださったとおりに、固く守ることを約束いたします。そして、聖務日課において守るべきことや、その他の会則で定められた守るべきことを、私と共にいる兄弟たちにも伝えます。

アシジの聖フランシスコ

	日	月	火	水	木	金	土
第1唱和	詩編 93	詩編 84		詩編 86	詩編 87	詩編 51	詩編 119
第2唱和	ダニエル3			イザヤ 33	イザヤ 40	エレミア 14	知恵 9
第3唱和	詩編 148			詩編 98	詩編 99	詩編 100	詩編 117

詩編 93

1, 今日、私たちが考察しようとしている詩編 93 の本質的な内容は、月曜日の晩の祈りの賛歌のいくつかの歌詞によって生き生きと表現されています。「おお、素晴らしい創造主、宇宙の調和の中で海の逆巻く波に道筋と限界を設けられた御方、乾ききった大地の荒れ果てた荒野を小川と海によって潤してくださった。」

水という力強い象徴によってこの詩編中心部分に入っていく前に、その基礎となっている流れを理解するようにいたしましょう。文学類型がそれを助けてくれるでしょう。ただ今私たちが考察している詩編は、これに続く詩編 95-98 のように、聖書学者たちによって「私たちの王である主を歓呼する歌」と呼ばれています。私たちが「主の祈り」の中で「み国が来ますように!」と懇願する時に祈る平和と真理と愛の源である神のみ国を称揚しています。

実際、詩編 93 は特に喜びに満ちた次のような叫びによって始まります。「神は王」(詩編 93:1)。詩編作者は神の生き生きとした王職を祝っています。それは世界を創造し、人間を贖ってくださった神の力ある救いのみ業です。主は、はるかかなたの天にまします冷淡な皇帝でなく、力強く、愛において偉大な救い主として、ご自分の民の只中に現存しておられるのです。

2, 王である主はこの賛美の賛歌の最初の部分を占めています。権威あるもののように、栄光の玉座、永遠不滅の玉座に座しておられます(詩編 93:2 参照)。そのマントは超越の輝きであり、その衣の帯は全能です(詩編 93:1 参照)。神の全能の主権はこの詩編の中心部に現れています。この主権は、逆巻く水という心を打つ象徴と比較されています。詩編作者は、特に、川の「声」、言葉を変えるなら、その水の轟きに言及しています。大きな滝の轟きの産み出す巨大な力の衝撃に、人々の耳は劈かれ、体全体が震えに捉えられます。詩編 42 は同様の衝撃を心に呼び起こします。「あなたの激流のとどろきは、ふちからふちへとこだまし、さかまく波はわたしの上を越えていく」(詩編 42:8)。このような自然の力の前に人間は小さいものに過ぎませんが、その力を詩編作者は主の力を称揚するためのトランポリンとして使っています。主の力は遥かに偉大なものです。三度も繰り返されている、「声をあげる」という言葉は(詩編 93:3 参照)、神の超越的な力を三度繰り返して断言することによって応答されています。

3, 教会の教父たちは、好んで「主であり救い主である」キリストにあてはめることによってこの詩編に解説を施しています。聖ヒエロニモによってラテン語に翻訳されたオリゲネスの言葉によれば、「主は支配されます。主は美しさを身に纏っておられます。肉において公けにふるえおののいた主は、今や神性の威光の内に輝いておられます。」オリゲネスにとって声をあげている川や水は「預言者や使徒たちの権威ある姿」です。彼らは「主に賛美と栄光を宣言し、全世界に対する主の裁きを告げているのです」(詩編解説)。

聖アウグスチヌスは激流と大海原をとという象徴をさらに発展させていきます。増水して氾濫した川のように、聖霊によって満たされて力づけられた使徒たちはもう恐れることなく、ついに声を上げるのです。しかし、「多くの声がキリストを告げ始めるとき、

海は荒れ狂いはじめる」のです。聖アウグスチヌスは言います。この世界という大海原の潮流と濁流の中で、教会という小さな帆掛け舟はひどく揺れ動いているように見え、脅迫と迫害によって危険にさらされながらも、「主は脅威に満ちていと高きところに居られる」のです。この主が「海の大水の上を歩み、その波を静められるのです。(詩編解説)」

4, すべてのもをすべ治めておられる全能で無敵の神は常にご自分の民のそば近くにおられ、彼らにご自分の教えを授けておられます。これが、詩編 93 が最後の節で表現していることです。天のいと高き玉座は、エルサレムの神殿の契約の櫃の座によって予め示されており、神の宇宙的な声の力は、その誤ることのない聖なるみ言葉の甘美さに取って代わりました。「神よ、あなたのことばは変わることなく、あなたの家はとこしえにとうとい」(詩編 93:5)。

こうしてこの短い、しかし祈り深い広がりをもつ賛歌は終わります。この詩編 93 は、歴史の嵐によって圧倒され、立ちふさがる暗闇の勢力によって打ちのめされる心配に心休まることがないと感じている信者たちの内に、信頼と希望を注ぎ込む祈りです。この詩編のこだまは、ヨハネの黙示録の中で、靈感に満ちた著者が、暴虐なバビロンの崩壊を祝っている天の大いなる群衆を描写しながら、次のように語るどころに見出されます。「大水の轟きのようであり、激しい雷のようでもある大群衆の声が叫ぶのを、私は聞いた。『アレルヤ! 私たちの神、全能である主は王となられた!』」(黙示録 19:6)。

5, 教父たちの中でも卓越している「神学者」、ナジアンズの聖グレゴリオの言葉に耳を傾けながら、詩編 93 についての私たちの考察を終えることにいたしましょう。彼の数ある詩の中の一つを通して、この考察を終えたいのです。この詩の中で、王にして創造主であられる神への賛美は、三位一体的次元を獲得しています。「父よ、あなたは、すべてのもに適切な場所を与え、ご自分の御摂理によってそれらを保ちながら、この世界を創造してくださいました。…あなたのみ言葉は御一人子の神であります。彼は御父と同じ本性を持っておられ、誉れにおいて御父と等しい御方。すべてのもを支配するために調和よくこの世界を整えてくださいました。そして、神である聖霊は、すべてのもを抱きながら、すべてのもを安全に守り、心を配っておられます。生ける三位にして唯一の御方、ただ一人の王、…諸々の天を支えておられる堅固な力、私たちの目には近寄りが見えながら、この世界を観想し、底知れぬ深み、あらゆる秘められた地の深みまで見通される御方、私はあなたを宣べ伝えましょう。おお、父よ、私に対してよい御方であってください。…私はいづくしみと恵みを見出すことでしょう。なぜなら、栄光と恵みはとこしえにあなたのもだからです。(Carm. 31 in Poesie/1)」

### 第3週 主日 朝課 第2唱和

#### ダニエル3章

1, この連祷のような光に満ちた祈りはダニエル書3章に含まれているまことの被造物の歌で、朝の祈りの典礼が私たちにさまざまな機会に断片的に差し出しています。

私たちは今、要点を繰り返し述べている2つのアンティファンに挟まれた荘厳な宇宙の聖歌隊による主要部分を拝聴いたしました。「造られたものはみな神を賛美し、代々に神をほめたたえよ…神よ、高い大空の中で、あなたは賛美され、すべてにまさり代々にほめたたえられる」(ダニエル 3:56, 57)。

この2つの歓呼の叫びにはさまれて、「たたえよ」という招きを繰り返しながら表現される荘厳な賛美の賛歌が展開していきます。この形式は神をたたえるようにとすべての被造物への招き以外のなにものでもないように思われますが、実は、素晴らしい全被造物のゆえに感謝する信者が主に向かって立ち昇らせている賛歌なのです。人が、神に感謝したたえるために、全被造物に声を与えているのです。

2, 神を賛美するようにと全被造物を招く3人の若者たちによって歌われているこの賛歌は劇的な状況の中で産み出されたものです。バビロニア王に迫害されていたこの3人の若者たちは信仰のゆえに燃える炉の中に投げ込まれます。しかし、殉教に直面しながらも、彼らは神に歌い、喜び、賛美することを躊躇しません。祈りと観想の中で溶けてしまったかのように、厳しい暴力的な試練の痛みは消えてしまいます。これこそ神の介入を引き出す信頼に満ちた委託の態度なのです。

実際、ダニエルの生き生きとした報告の通り、「主の天使はアザリアとその伴侶たちと共にいるために炉の中にくだり、燃える炎を炉の外に向けたので、炉の中を潤いのあるそよ風のようにした。火は彼ら皆にふれることも、傷つけることも、困らせることもなかった」(ダニエル 3:49-50)。全人類が賛美し、信頼し、期待し、希望するようになれば、悪夢は陽の光の中の霧のように蒸発し、恐れは溶け崩れ、苦しみは消え去ります。これこそ、純粹で、熱烈で、私たちの神なる贖い主に全く明け渡した祈りの力です。

3, 3人の若者たちの歌は、天使たちが集い、太陽と月と星が共に輝く天において始まって進んでいく一種の宇宙の行列を描写しています。神は高みからこの地上に天上の水を注ぎ(ダニエル 3:60 参照)、それが雨や露となります(ダニエル 3:64 参照)。

しかし、風が吹き、雷が轟き、…冬の寒さ、燃える夏の暑さが炸裂し、そばには氷と寒さと霜と雪が控えています(ダニエル 3:65-70, 73 参照)。最後に大地と空とが触れ合っているように見える山の頂に眼差しは留まります(ダニエル 3:74-75 参照)。

この地上で成長するすべてのもの(ダニエル 3:76 参照)は皆そろって神をたたえて歌います。命と新鮮さをもたらす泉、膨大で神秘的な水をたたえる川や海。実際、詩人は、神が従わせるために限界を置いた(詩編 93:3-4, ヨブ 38:8-11, 40:15-41, 26 参照)原初の水の混沌の様子として、海の諸々の被造物と魚と共に「鯨」を思い描いています(ダニエル 3:79 参照)。

それから、水中や地上、空で生き、動き回っている動物たちの雄大でバラエティに富んだ王国が登場します(ダニエル 3:80-81 参照)。

4, この場面に登場する最後の被造物は人間です。最初に、詩人の眼差しは「人の子ら」すべての上を眺め一望します(ダニエル 3:82 参照)。次にその注意は神の民イスラエルに焦点があてられます(ダニエル 3:83 参照)。そして、司祭としてだけでなく、信仰と正義と真理の証し人として神に全面的に奉獻されたすべての人へと向かっていきます。彼らは「神のしもべ」、「神に従う人」、「神を敬いへりくださる人」であり、この人々の中から3人の若者たちが現れます。この世界の全被造物に声、永遠の賛美の歌を与え

たのはハナンヤ、アザルヤ、ミシャエルです(ダニエル 3:85-88 参照)。

主を「たたえ、賛美し、ほめたたえよ」と典礼にあるとおり、神に栄光を帰する3つの動詞が絶え間なく響き続けます。これは、全被造物を包含している聖歌隊の一員となった喜びによる絶え間ない主の祝いなのです。

5、この3人の若者たちの歌にはっきりと関係付けながら創造の6日目について解説しているオリゲネス、ヒッポリト、チェザールのバジリオ、ミラノのアμβロージウス等教父たちの言葉に耳を傾けて、この考察を終えることにいたしましょう。

時間に限界がありますので、ここでは、聖アμβロジウスの解説に留めることにいたしましょう。彼は、太陽と語り合っている大地を想像し、神への賛美において一致している全被造物を示しています。「太陽は本当に良いものです。私に実を結ばせ、その実を熟させてくれます。太陽は私自身の善のために与えられ、私と共に、大いなる苦勞に服しています。太陽は私と共に、子どもたちが養子とされ人類が贖われ、そうして私たちが奴隷状態から解放されるようにとうめいています。私のそばに私と共にいて、太陽は創造主をたたえています。私と一緒に私たちの主なる神に賛美歌を立ち昇らせています。太陽がたたえるところならどこでも、そこで大地もたたえます。私と共に、実のなる木々はたたえ、動物たちはたたえ、小鳥たちはたたえます」(I giorni della creazione, Seamo, I, Mirano-Rome1977-1994, pp. 192-193)。

誰であれ、海の被造物たちでさえも、主の祝福から除外されることはありません(ダニエル 3:79 参照)。実際、聖アμβロジウスは次のように続けています。「蛇たちも主をたたえています。彼らの本性と姿は確かに私たちに美しさを示し、彼らが義とされたことを示しています」(同上 pp. 103-104)。

以上が、私たちがこの賛美の交響曲に喜びと信頼に満ちた私たちの声を加え、それに堅固で忠実な生活を伴わせるべきである、ということの理由ですなの。

### 第3週 主日 朝課 第3唱和

#### 詩編 148

1、ただ今私たちが神に向かって立ち昇らせた詩編 148 は、旧約における Te Deum であり、神の賛美の中にあらゆる人々、あらゆるものたちを巻き込む宇宙的「アレルヤ」であるまことの「被造物の歌」です。

この詩編について、現代の聖書解釈者が次のように解説しています。「彼らを名ざしで招いている詩編作者は、存在するものたちに秩序を与えています。時に従って運行している2つの天体を上に、それから星。一方には実を結ぶ木、他方には糸杉、一方の平野には地をはうもの、他方には翼ある鳥、こちらには支配者たち、あちらには民、二列になって、おそらく手をつないでいる若者とおとめたち…神は彼らに場所を与え務めを定められました。人類はそれらを受け入れ、言葉によって彼らに場所を与え、このように整頓し、典礼的な祝いへと彼らを招きます。人間は「存在するものの牧者」あるいは被造物の司式者なのです」(L. Alonso Shokel, Trenta psalmi; poesia e preghiera(30

の詩編;詩と祈り) Bologna, 1982, p499)。

全宇宙を神殿とし、天の丸天井にこだまするこの宇宙的合唱に、私たちもついていきましょう。

2, 私たちは、諸々の天の中に星の歌い手たちを見出します。運行していく天体、天使たちの聖歌隊、太陽と月、きらめく聖座、大空、そこは星の空間であり、聖書における人間がイメージした天の上には、水が雨としてこの地上に降ってくる前にそこにあるため池に蓄えられているのです。

「主を賛美せよ」という招きである「アレルヤ」はすくなくとも8回も鳴り響き、その目的である天体の秩序と調和をもたらします。「神は造られたものにおきてを与え、とこしえにそれを定められた」(詩編 148:6)。

それから、すくなくとも 22 の歌い手たちの行列が現れる地平線へと私たちのまなざしは向かいます。私たちの惑星を覆っているアルファベットの文字の賛美です。ここには海の怪物や、水の混沌の象徴である海の深みもあります。古代セム語族の宇宙概念に従えば、大地はそこに基礎をおいているのです。

教会の教父の一人、聖バジリオは次のように解説しています。「深い淵でさえも詩編作者にとっては卑しいものとみなされることはありません。それらは、全被造物の聖歌隊の中に含まれているというだけでなく、自らの言葉によって創造主への調和ある賛歌を完成しているのです」(Homiliae in hexaameron, III9:p29, 75)。

3, 行列は環境という被造物たちによって続きます。敏速な神のメッセンジャーと考えられている、いなずまの閃光、あられ、雪、霜、ふきすさぶ風(詩編 148:8 参照)。

それから、一般にもっとも古い被造物と考えられていた山と丘が登場します(詩編 148:9a 参照)。植物界は実を結ぶ木と糸杉(詩編 148:9b 参照)。動物界は野のけもの、かちく、地をはうもの、翼ある鳥によって描写されています(詩編 148:10 参照)。

最後に、この被造物の典礼を司式している人間が、あらゆる世代と境遇に従って描写されています。子どもたち、若者、年老いた者、支配者、王、民(詩編 148:11-12 参照)。

4, さあ、この広大な合唱を考え、理解するために聖ヨハネ・クリズストモに助けをもらいましょう。前回のカテキズムの時に考察した3人の若者たちの歌について解説した言葉があります。

コンスタンチノーブル大司教区の偉大な教父は次のように述べています。「聖人たちは、偉大な精神の広さのゆえに、神に感謝するために集る時には、この美しい典礼において彼らと共に役割を分担してもらおうとして、一緒に神への賛美を歌うよう多くの人々を招きます。炉の中の3人の若者たちが受けた賜物のために神をたたえ、賛美を歌うために全被造物に呼びかけた時、彼らはこのことをしたのです(ダニエル 3)。この詩編は世界のさまざまな部分、上にあるものにも下にあるものにも向かい、感覚と知性にも向かい、同じことをしています。預言者イザヤが次のように語った時にも、同じことをしたのです。「天よ喜び歌え、地よ喜び、…主はご自分の民を慰め、ご自分の愛する者たちにいつくしみを示された」(イザヤ 49:13)。詩編は続けます。「イスラエルがエジプトを出て、ヤコブの家がことばの違う民から離れた時、…山は雄羊のようにおどりがり、丘は子羊のように喜びおどった」(詩編 114:1, 4)。イザヤには次のような箇所もあります。「天は露のように義人を降らせよ」(イザヤ 45:8)。実際、主を賛美して歌う

には自分だけでは不十分だと考えて、聖人たちは共に賛歌を歌うようにとすべてのものを巻き込みながらあらゆる方角に向かうのです」(Expositio in psalmum CXLVIII:p55)。

5, 私たちもまた、神の神秘の2つの基本的な次元について、あらゆる被造物のはっきりとした声となって神を賛美しながら、この巨大な合唱に合流するようにと招かれています。一方では、「神は偉大。その栄光は天地をおおう」(詩編 148:13)とこの詩編が語っているように、私たちは神の超越的な偉大さを礼拝しなければなりません。他方、「神はその民を高められた…神に選ばれた民(神に近い民)、イスラエル」(詩編 148:14)。この詩編が繰り返し断言しているように、神はご自分の被造物に近づいてくださり、特にご自分の民を助けるために近づいてくださったのですから、私たちのもとに降りてきてくださった神のいつくしみを認識すべきです。

全能にしていつくしみ深い創造主のみ前で、神を賛美し、神を高め、神のみ業のゆえに神を祝うようにという聖アウグスチヌスの招きを取り上げましょう。「皆さんがこれらの被造物を観察し、楽しみ、すべての物質と被造物の建築家に向かって目を上げ、彼の目に見えない属性を知性で観想する時、天と地に告白の声をあげているのです。被造物が美しいのであれば、その創造主はどれ程美しいことでしょうか、と」(Esposizioni sui Salmi 詩編解説 Rome, 1977, p887-889)。

### 第3週 月曜日 朝課 第1唱和

#### 詩編 84

1, 私たちは、朝の祈りの典礼の詩編をたどる旅を続けます。ただ今、私たちは詩編 84 を拝聴いたしました。この詩編はユダヤ人の伝統的によれば、典礼奉仕と契約の櫃の幕屋の警備を務めとしていた祭司の家族(歴代上 9:19 参照)である「コラの子ら」の作とされています。

命の神への神秘的な憧れがみなぎるもっとも魅力的な詩編です。天の軍勢、つまり宇宙の主である「すべてを治める神」というみ名を繰り返し称えています(詩編 84:3, 5, 9, 13)。さらに、この称号は、「ケルビムの上に座しておられる万軍の主の契約の櫃」(サムエル上 4:4;詩編 80:2 参照)として知られていた、神殿に安置されていた櫃との特別なかわりを持っていました。実際、それは、危険と戦いの時の神のご保護のしるしと見なされていました(サムエル上 4:3-5;サムエル下 11:11 参照)。

この詩編全体の背景には、信じる者たちの巡礼が目指す神殿が描かれています。詩編作者が夏の焼けつくような暑さを和らげる「秋の雨」(詩編 84:7)について言及していることから、季節は秋のようです。このことは私たちに、ヘブライ暦の三大祭の一つ、イスラエル人の荒野での旅を記念する幕屋祭のためのシオンへの巡礼を考えさせます。

2, 神殿は、この詩編の初めと終わりに、情熱の限りを尽くして描かれています。聖所に自分たちの巣を作った小鳥たち(詩編 84:2-4 参照)の素晴らしくデリケートなイメージで始まります。うらやましいほどの特権です。

それは、神殿の祭司たちのように、親密さと平和を味わいながら いつまでも神の家

に住んでいる人々すべての幸せの描写です。事実、信じる者の全存在は、ほとんど身体的と言えるような生き生きとした神への憧れによって促され、主の方へと引っぱられています。「私の魂はあなたの庭を慕い、心をこめてあなたの命を喜び歌う(心と体は生ける神に憧れる)」(詩編 84:3)。それから、この詩編の終わりに神殿が現れます(詩編 84:11-13 参照)。詩編作者は神の庭でいくらかの時間を過ごした自分の大きな幸いを表現し、この靈的幸いを、不正と倒錯によって悪名高き幕屋「よこしまな人の幕屋」へと人を押しやる偶像の幻想と比較しています。

3, 生ける神の聖所だけに光、いのち、喜びがあり、義の道を選んで主に「信頼を置く」人々は幸いなのです(詩編 84:12-13 参照)。道というイメージはこの詩編の中心へと私たちを連れて行ってくれます(詩編 84:5-9 参照)。そこでは、もう1つのもっと重要な巡礼が行われています。堅固な道(様式)で神殿に住む人は幸いであり、エルサレムへの信仰の巡礼に出かける決心をする人はさらに幸いなのです。

詩編 84 の解説において、教会の教父たちは6節に傑出した地位を与えています。「しあわせな人、あなたによって奮いたち、巡礼を志す人」。初期の詩編の翻訳は聖なる都への「登攀」を完成する決意について語っています。そこで、教父たちにとっては、シオンへの巡礼は、神が完全な喜びをもってご自分の友を受け入れてくださる(ルカ 16:9 参照)「永遠の幕屋」に向かう義人のたゆみない前進の象徴となりました。

地上の巡礼の中にイメージとしるしを見出しているこの神秘的「登攀」について、ひと時思い巡らしてみましよう。7世紀にシナイ山の修道院長であったキリスト教作家の言葉によってそうしましょう。

4, ヨハネ・クリマコスは「La Scala del Paradiso(天の階段)」という論文全体を、靈的生活によって昇っていく数え切れない階段を描写することに捧げました。この作品の終りに、彼が靈的進歩のはしごの頂上とみなしていた愛徳について最後の言葉を語っています。

詩編 84 によってすでに勧められている心のあり方と態度を勧めながら、私たちに招き、訓戒するのは愛徳です。「昇りましょう、私の兄弟たち、熱心に昇りましょう。登る決心をなささい。『さあ、主の山に登ろう。私たちの神の家に』(イザヤ 2:3)と語り掛ける声に耳を傾けましょう。神は『私たちの足をしかのように早くし、高い所に導かれる』(ハバクク 3:19)ので、私たちは神の道において勝利者となるでしょう。走りなさい、お願いですから、『私たち皆が信仰における一致、神の知識における一致、円熟した大人、キリストの背丈一杯にまで達するように急ごうではありませんか』(エフェソ 4:13 参照)と語りかける使徒と共に走りなさい」(La Scala del Paradiso 天の階段, Rome 1989, p. 355)。

5, 詩編作者は、何よりもまず、聖地のさまざまな地方からシオンへと導く具体的な巡礼を考えています。降ってくる雨(詩編 84:7 参照)は、彼にとっては、神殿で主と顔と顔を合わせる(詩編 84:8 参照)時に、マントのように自分を包むであろう喜びにみちた祝福の前味のように思われます。「涙の谷(枯れた谷)」(詩編 84:7)を通る厳しい巡礼は、力を与えてくださる神が、信じる者の祈りを聴き、彼を守る「たて」となってくれる(詩編 84:10 参照)最後の切り札である(詩編 84:10 参照)という確信によって、変容されてしまいます。



具体的な巡礼は、この光—御父の眼差し—の内に変容され、神とのへだたりと神との親しさ、神秘と啓示との間に置かれた私たちの生涯についての比喩となります。日々の生活の荒野においてさえ、6日間の仕事の日、日曜日に集まる私たちの教会の典礼と祈りを通して、第7の日の神との出会いによって、信者を照らし聖化するものとされます。

ですから、歩きましょう。「涙の谷」に行く時も、平和と交わりの輝くゴールに目を注ぎながら。この詩編を封印する交唱のような最後の幸せを心の中で繰り返しましょう。「万軍の主よ、あなたに信頼する人は幸せ」(詩編 84:13)。

### 詩編 86 第3水曜日 朝課 第1唱和

1,ただ今、朗読されました詩編 86 は、これから私たちが考察していこうとしている詩編であります。この詩編は、印象的な詩編作者についての描写を提供しています。彼は次のような言葉を携えて神の御前にやってきました。私は「あなたのしもべ」、「あなたのはしための子」(詩編 86:16)。たしかに、この表現は宮廷における儀式用語に属するものですが、家族か部族の頭によって息子として養子縁組していただいた僕を示すために用いられました。この光のもとで、自分を主の『忠実なもの』(詩編 86:2 参照)と定義しているこの詩編作者は、単に従順によってだけではなく、家族的な交わりの絆によって神に結ばれていると感じています。この理由から、彼の祈りは信頼に満ちた委託と希望を表現しています。

2,この詩編は、その愛に信頼を置いている主へと向けられています(詩編 86:1-7 参照)。最後に、再び、主は「あわれみに満ち、恵み深い神、怒るにおそく、いつくしみとまことにあふれておられる神」(詩編 86:15, 出エジプト 34:6 参照)である、という確信を表明します。繰り返して、確信をもって述べられている信頼の表現は、「あなたに助けを求める人にいつくしみを注がれる(詩編 86:5)」主に対する委託の行いによって、汚れなく純粋な信仰を表しているのです。

この詩編の中心部では、神が民々の前で示された救いの御業に対する信仰を宣言するとともに、感謝の思いを交互に歌う主への賛美が歌われています(詩編 86:8-13 参照)。

3,偶像礼拝に対するあらゆる誘惑に対して、詩編作者は神が唯一絶対であることを宣言します(詩編 86:8 参照)。彼は、最後には、「すべての民がイスラエルの神を礼拝する日が来る」という大胆な希望を表明します(詩編 86:9 参照)。この素晴らしい期待は、キリストの教会においてその成就を見出します。なぜなら、キリストは御自分の弟子たちを「すべての民に」遣わしたからです(マタイ 28:19)。他の何ものでもなく主こそは完全な解放をもたらすことができます。なぜなら、すべてのものは被造物として主に依存しており、すべてのものは礼拝の態度の内に主に向かうべきであるからです(詩編 86:9 参照)。事実、主は宇宙と歴史の中で御自分の素晴らしい御業を現されますが、それらは主の絶対的な権威に対する証しとなります(詩編 86:10 参照)。

ここで、詩編作者は熱心で純粋な願いをこめて自ら神の前に出ます。「神よ、あなた

の道を示してください。誠実にあなたに従い、わたしの心がひたむきに、あなたの名をあがめることができるように」(詩編 86:11)。神の御意志を知ることができますように、という意向は、二心を抱いたり計算高い判断をすることなしに、人生の道において自分を御父に全く委ねきっている、子どものような「心がひたむき」であるという賜物を獲得するための祈りです。

4, それから、自分を絶望や死、悪、罪の中に陥れることに同意なさることのないいくしみ深い神に向かって、信じる者たちの口から賛美がほとぼしり出ます(詩編 86:12-15, 詩編 15:10-11 参照)。

詩編 86 は、ユダヤ教にとってなじみ深い祈りです。その最も重要な祭りの一つである贖罪の日、ヨム・キプルの典礼の中には、この詩編が挿入されています。一方、黙示録では、この詩編の一節(86:9)を、栄光に満ちた天国の典礼の中で、「神の僕モーセの歌と子羊の歌」の中心部に抜粋しています。「諸国の民はみな、み前に進み、ひれ伏して(第1金曜日晚課第3唱和では「すべての民が来て、あなたの前にひれ伏す」)」。そして、黙示録は付け加えています。「あなたの正しいさばきが明らかにされ」(黙示録 15:4)だからです。

聖アウグスチヌスは、この詩編をキリストの歌、さらにキリスト教徒の歌へと変容させながら、詩編註解の中でこの詩編についての長く情熱的な解説を献呈しています。ラテン語の訳では、ギリシア語の七十人訳を参考にして、第2節の中で、神を「おそれる」という言葉に「聖なる者」という言葉を当てはめています。「聖なる者の命を守ってください。」実際には、ただキリストお一人だけが聖なる者です。しかし、聖アウグスチヌスは次のように論証して、キリスト者にこの言葉をあてはめることができると言っています。「私は聖なる者です。なぜなら、あなたが私を聖なる者としてくださったからです。私が自分で聖なる者になったからではなく、あなたが聖なる者にしてくださったからです。私に功德があったからではなく、あなたが与えてくださったからです。」ですから、「一人ひとりのキリスト者は、キリストの体全体がそのように語るができるのと同様に、多くの艱難や誘惑、攻撃を耐え忍びながらも、いかなる場所においても、次のように叫ぶのです。私は聖なる者ですから、私の魂をお守りください。私の神よ、あなたに希望を置いている、あなたの僕をお救いください。御覧なさい、この聖なる人は誇っているのではありません。なぜなら、彼は自分の信頼を神においているからです」(詩編註解)。

5, 聖なるキリスト者は自らを教会の普遍性に向かって開きながら詩編作者と共に祈ります。「主よ、あなたに造られた諸国の民はみな、み前に進み、ひれ伏してあなたをたたえる」(詩編 86:9)。アウグスチヌスは次のように解説しています。「唯一の主においてすべての民は一つの民です。これは真の唯一性です。同時に普遍教会と諸教会が存在していますが、これらは諸教会からなる普遍教会なのです。ですから、多くの民である一つの民なのです。以前は民々、多くの民々でしたが、今はただ一つの民です。なぜなら、信仰は一つ、希望は一つ、愛は一つ、期待していることがらも一つであるからです。最後に、もし一つの国であるのなら、何故、民も一つなのでしょう? 私たちの国は天国であるからです。私たちの国はエルサレムなのです。西から東から、北から南から来たこの民は、全世界の四方へと広げられていくのです。(同上)」

この普遍的な光の中で、私たちの典礼的な祈りはすべての被造物の名において主に向かう一つ賛美の呼吸、一つの栄光の賛歌へと変容されるのです。

### 第3水曜日 朝課 第2唱和

#### イザヤ 33 章

親愛なる兄弟姉妹の皆様、

1,ただ今、私たちは、朝の祈りの中に詩編と共に織り込まれている旧約の歌の一つが朗読されるのを拝聴いたしました。それは、預言者イザヤが収集した広範囲に及ぶ素晴らしい神からの託宣の中の 33 章からとられていました。

引用されていた箇所(イザヤ 33:11-12 参照)において、神が人間の歴史という舞台の上に力強く堂々と登場しておいでになったことを宣言することによって、この賛歌は始まっています。『今こそ、わたしは立ち上がる』、と主のお告げ、『私はいと高きものであることを現そう。今こそ、私は高められる。』(イザヤ 33:10) この神のみ言葉は「遠くにいる」ものたちにも、「近い」ものたちにも、すなわち、すべての国々、もともと遠いところから、主に「近い」民族であるイスラエルにまで、語られているのです。なぜなら、それは契約に関するものだからです(イザヤ 33:13 参照)。

イザヤ書の別な箇所では次のように語られています。『私は自分の唇に置こう。平和、平和、遠い人々にも近い人々にも。』主のお告げ。(イザヤ 57:19)。」しかし、今、主のみ言葉は「遠く」でも「近く」でも悪人に対しては厳しい裁きの響きとなります。

2,事実、すぐ後で、ご覧の通り、罪と邪悪が根をおろしてしまったシオンの住民の間に恐れが広がります(イザヤ 33:14 参照)。神殿にお住みになり、歴史を通して彼らと共に歩むことを選びになって、ご自身を「イマヌエル、共におられる神(イザヤ 7:14 参照)」へと変容なさった主のおそばで暮らしていることが、彼らにとっては気がかりになってきます。しかし、聖にして正しい主は不信心、腐敗、不正を黙認することはできません。「焼く尽くす火」であり「燃える炎」であられる(イザヤ 33:14 参照)主は、悪を破壊するために打ちかかってこられます。

イザヤはすでに 10 章で警告しています。「イスラエルの光である御方は火となり、神の聖なる御者は炎となって焼き滅ぼす。(イザヤ 10:17)」詩編作者もまた、次のように歌っています。「日に溶けるろうのように、神に逆らう者は髪の前から滅び去る」(詩編 68:3)。旧約聖書の摂理的な文脈において、このことは、神が善と悪とに無関心ではおられないこと、また、邪な人々の面前では憤りと怒りを表される、ということの意味しています。

3,この賛歌は、このような裁きという暗い場面で終わるわけではありません。それどころか、第一の、そして最も強調されている箇所は、神によってもたらされた回心と和解の印として受け取られ、生きられている聖性に対して費やされています。神殿の典礼において神との喜ばしい交わりの内に生きるために主が命じておられる条件に光をもたらしてくれる詩編 14 章や 23 章のようないくつかの詩編に続いて、イザヤは、忠実で

正しい(イザヤ 33:15 参照)まことの信仰者のために、彼らが自分たちにとっての恩恵の源泉である神的炎と調和しながら暮らしていけるように、6つの倫理的義務をあげています。

最初の義務は、「正しく歩」むことです。このことは、人生の小道に光を灯してくれるランプとしての神の掟と見なされています。二番目は、正直で慎み深い話し方です。これは誠実で真実な人間関係です。第三の義務として、イザヤは「人むをしいたげて利をむさぼらず」と指摘しています。不正な富を避けると同時に、貧しい人々を虐げる者たちに抵抗するのです。それから、信じる人々は「わいろをとらない者」、政治や裁判の腐敗を断罪することを堅く決心しています。法律の適用や正義の実践をゆがめるような贈り物の回避を描く意味深い象徴です。

4, 第五の倫理的義務は、流血や暴力の行為を行うようにという申し出のあった時には「耳をかさず」という意味深い行為によって表現されています。第六の最後の命令は、一見ただけでは、私たちにとって無関心に見えるような象徴によって表現されています。私たちが「目を奪われたい」と言う時には、「介入するべきではないので見ない振りをする」と言うことになるでしょう。しかし、預言者は、彼が悪人と共に何かをしなければならなくなるのをきっぱりと回避することの印として、誠実な人は「悪人を見ないために目を閉じる」と言っているのです。

イザヤ書の解説の中で、聖ヒエロニモはこの節全体を取り上げた考察によって次のような概念を産み出しました。「あらゆる罪悪、暴虐、不正は流血の決断をすることです。剣で殺すことはなくとも、思いによって殺すことになります。ですから、悪を覆い隠すために目を閉じなさい。悪に耳をかさず、目を注ぐことのない良心は幸せです。このような人は誰でも、『いと高きところ』、すなわち天の国、あるいはもっとも峻険な岩場のいと高き裂け目、イエズス・キリストの内に住むでしょう。(イザヤ 10, 33:PL24, 註解)」このようにして、ヒエロニモは、預言者によって言及された「目を閉じる」ということの正しい理解を私たちに紹介してくれたのです。このことは、私たちが悪とのいかなる共謀をも絶対に拒むようにと招いています。感知することがたやすいことから、体の主要な感覚は挑発されています。手、足、目、耳、そして舌は人間の倫理的行為に巻き込まれてしまうのです。

5, この調和と正義の小道をたどることを選んだ人は誰でも、神との交わりの内に生きる人々に神がお与えになる外的及び内的な幸福を守っていただくことができるよう、主の神殿近づくことを許されることでしょう。預言者はこのハッピー・エンドを言い表すために、二つの象徴を用いています(イザヤ 33:6 参照)。難攻不落の要塞の中にいる安全と、裕福で幸せな生活のシンボルであるパンと水の豊かさです。

キリスト者にとって、パンがエウカリスチアの印に変容されたように、伝統的に、水という象徴は自ずと洗礼の象徴として解釈されてきました(たとえば、バルナバの手紙 11:5)。このような読み方は、例えば、証聖者聖マキシモの解説の中に見出されます。彼は、イザヤの言葉を、キリストの贖いのための死の「記念」であるエウカリスチアの「パン」についての預言として考えています(Dialogue with trypho, Chapter 70 参照)。

詩編 98

1,ただ今朗読された詩編 98 は、詩編の光のもとに続けている霊的な旅路の途上で出会ったことのある、ある種類の賛歌に属しています。

この詩編は世界と歴史の王(詩編 98:6 参照)である主への賛歌です。「新しい歌」(詩編 98:1 参照)と述べられています。これは聖書の用語では、祝祭の音楽に伴われた完全で十全で荘厳な歌という意味を持っています。事実、詩編作者は、合唱曲に加えて、たて琴の「調べ」(詩編 98:5 参照)、ラッパと角笛(詩編 98:6 参照)、宇宙的喝采(詩編 98:3)を呼び集めています。

さらに、「神」のみ名が繰り返し(6回)響き渡ります。神は、歴史の中に救いを成就し、世界と諸国の民を「さばく」ことを待ちながら(詩編 98:9 参照)、威厳に満ちてこの場面の中央におられます。「さばき」を示すヘブライ語の動詞は「治めること」をも意味します。こうして、すべてのものは、平和と正義の内に迎え入れてくださる全地の支配者の力あるみ業を待っているのです。

2,この詩編はイスラエルの歴史の中心に神が介入してくださったことの宣言によって始められます(詩編 98:1-3 参照)。「右の手」や「とうとい腕」のイメージはエジプトでの奴隷状態からの解放、脱出(出エジプト)に由来しています。これに代わって、選ばれた民との契約は「いつくしみ」と「まこと」(詩編 98:3 参照)という2つの神の偉大な完徳を通して思い起こされています。

これらの救いのしるしは、「諸国の民」と「遠く地の果てまで、すべての者」に啓示されます(詩編 98:2, 3 参照)。こうして、全人類が救い主である神に引き寄せられ、神のみ言葉と救いのみ業とに開かれるのです。

3,歴史の中に介入してくださる主のためにとっておかれた歓迎は世界的賛美によって特徴付けられています。シオンの神殿のオーケストラと賛美歌に加えて、この世界という宇宙的な神殿が参加します。

この巨大な賛美の聖歌隊には4人の歌手がいます。まず、この荘厳な賛美歌で常にバスのパートをとっているように思われる、逆巻く海です(詩編 98:7 参照)。荘厳にハーモニーを響かせて続くのは地とそこに満ちるものと世界とそこに住む者たちです(詩編 98:4, 7 参照)。続いて響き渡るのは、海の腕と考えられていた川です。彼らはそのリズムカルな流れによって手をたたいて拍手しているように思われています(詩編 98:8 参照)。最後は、最もどっしりと押し付けるように創造されたにもかかわらず、主のみ前で喜び踊っているかのような山々です(詩編 98:8; 28:6; 114:6 参照)。

王であり正しい審判者である種を崇めるといった一つの目的のために輪となっている聖歌隊です。事実、この詩編の終りでは、神を「世界をさばきに(治めるために)来られる。正義と公正をもって…」(詩編 98:9)と描写しています。

「あなたのみ国が来ますように」一創造の原初の調和が再建される、平和、正義、曇りない王国、これこそ私たちの大いなる希望であり私たちの切なる願いです。

4,この詩編の中に、深い喜びをもって使徒パウロはキリストの神秘における神のみ業についての預言を見出しています。彼の重要な手紙であるローマ書においてこの詩編の

2つの節を引用しています。福音の中に「神は…正義を現された」（ローマ 1:17 参照）。

「神は…正義を現され」ました（ローマ 3:21 参照）。

パウロの解説はこの詩編により偉大な成就の意味合いを与えています。旧約の視点で読むなら、この詩編は神がご自分の民を救い、これを見た諸国の民が驚嘆すると宣言しています。しかし、キリスト教的視点によるなら、神はイスラエルの末であるキリストの内に救いのみ業をなさいます。諸国の民は彼を見てこの救いから恩恵を受けとるようにと招かれるのです。福音は「まずユダヤ人に、次いでギリシア人にも」、すなわち異邦人にも、「信じるすべての人に救いを与える神の力」（ローマ 1:16）であるからです。さらに、「遠く地の果てまで、すべての者が神の救いを見た」（詩編 98:3）だけでなく、この救いを受け取ったのです。

5、この視点において、聖ヒエロニモによって引用されている3世紀のキリスト教作家オリゲネスは、この詩編の「新しい歌」という言葉を、十字架に釘付けられた贖い主のキリスト教的新しさにあずかる祝いと解説しています。この詩編の歌を福音宣教に合わせている彼の解説に耳を傾けてみましょう。「この新しい歌とは、これまで聴いたことのない何か、すなわち十字架に釘付けられた神の子のことです。新しい現実が新しい歌なのです。『新しい歌を主に歌え』。御受難によって苦しまれた御方は実際には人間です。しかし、主に向かって歌うのです。彼は人間として御受難を苦しめましたが、神として救ってくださったのです。…キリストはユダヤ人たちの間で奇跡を行われました。麻痺した人を癒し、らい病の人を清め、死者を甦らせました。しかし、他の預言者たちも同じことをしたではありませんか。彼はわずかなパンを膨大な数に増やし、数え切れない人々に食べさせました。しかし、エリシャも同じことをしたではありませんか。では、新しい歌にふさわしいものとなるために、彼は一体どんな新しいことを行ったのでしょうか。彼が行った新しいことを知りたいですか。神が人として死んでくださり、そのおかげで人は命をいただいたのです。人の子が私たちを天に上げるために十字架に上げられたのです」（740melie sul libro dei Salmi 74 の詩編講話 Milan, 1993, p. 309-310）。

## 詩編 87 第3木曜日 朝課 第1唱和

1、ただ今、私たちが拝聴いたしました平和の町、世界の母である都エルサレムへの賛美は、この町が辿って来た歴史的体験とは食い違っています。しかし、祈りの務めは信頼の種を撒き、希望に命を与えます。

詩編 87 全体の展望は、イザヤ書の賛歌を心に思い起こさせてくれます。イザヤは、主のみ言葉を聞くためにシオンに向かって集まってくる諸国の民を見て、彼らの「剣を鋤に」、「やりを耕作用の鋤に」打ち直す、という平和の美しさを再発見しています（イザヤ 2:2-5）。実際、この詩編は一つのたいへん異なった遠近法を持っています。その動きは、シオンのほうに向き直る代わりに、シオンから出て行くのです。詩編作者はシオンの中において諸国民の源を見ています。詩編作者は、この聖なる都の優位性を述べた後で、その歴史的あるいは文化的功績によってではなく、ただこの都の上に注がれた神の

愛のゆえにすべての人々が兄弟姉妹とされるという普遍性についてのまことの祝祭を始めるのです。

2, シオンはイスラエルのみならず、全ての人の母と歌われています。このように断言することは非常にまれなことです。詩編作者はこのことに気がついていて、この点に注意を向けています。「神の町シオンよ、おまえに示された神のことばはすばらしい」(詩編 87:3)。この小さな国民の慎ましやかな首都が、どうして、はるかに力ある民々の源として描き出されているのでしょうか? どのようにして、シオンはこの偉大な宣言を実現するのでしょうか? 答えは、同じ節の中にあります。シオンは「神の町」、神の御計画によって建てられているから、すべての人の母なのです。

この地上のすべての中枢となる場所は、この母との関係において配置されています。ラハブとは、大いなる西の国、エジプトのことであり、よく知られた東の強国はバビロニア、北の商業民族を擬人化したシロ、南へ降りていったところにあるのがエチオピア、中心に位置するシオンの娘がパレスチナです。

エルサレムの霊的な記録簿の中には、この地上のすべての民族が記録されています。決まり文句が三度繰り返されています。「この地で生まれたものとしよう」(詩編 87:4, 5, 6) (5 節では「シオンはすべての者の母と呼ばれ」、6 節では「すべての人をシオンの民に加えられる」)。これは、当時、一人の人が特定の街の出身であることを宣言する時に用いられる正式な法律的表现です。このようにして、人はその国民としてのすべての市民権に預かる権利を与えられるのです。

3, イスラエルにとって敵と考えられている国々の人々さえ、エルサレムに上ってくることを命じられ、外国人としてではなく、「親戚」として迎えられるというのは、印象的です。実際、詩編作者はシオンに向かうこれらの人々の行列を、合唱隊と喜び一杯の踊り手たちに変容させています。彼らは、預言者たちが宣言したこと(エゼキエル 47:1-12, ゼカリヤ 13:1, 14:8, 黙示録 22:1-2 参照)によってこの一節の中に、全世界に実を結ばせる生きた水の川がほとぼしり出る神の都の中にある自分たちの「泉」を再発見したのです(詩編 87:7 参照)。

エルサレムでは、すべての民が自分たちの霊的な源泉を見出し、自分たちが故郷にいると感じ、同じ家族の成員たちを見出し、家に帰ってきた兄弟姉妹として互いに抱き合うはずで

4, 宗教間対話の一つのページである詩編 87 は、預言者たちの普遍的な遺産(イザヤ 56:6-7, 60:6-7, ホゼア 4:10-11, マラキ 1:11 等)をまとめ上げ、キリスト教的伝統がこの詩編を「天上のエルサレム」にあてはめることを予見しています。聖パウロは、「天上のエルサレムは自由であって彼女は私たちの母」でありこの地上のエルサレムよりも多くの子らを持つと宣言しています(ガラテア 26-27)。黙示録は、「神のもと、天から下ってくるエルサレム」について歌う時、同じことを語っています(黙示録 21:2, 10)。詩編 87 の流れにそって、第二バチカン公会議は、普遍教会の中に、「義人アベルから最後に選ばれる者にいたるまで」「アダムの時からのすべての義人たちが」一つに結ばれる場所を見えています。教会は「時の終わりにおける栄光ある完成」へと運ばれていくのです。(教会憲章 2)

5, この詩編の教会的解釈はキリスト教伝統の中に、一つのマリア論的鍵となる解釈を開きました。詩編作者にとっては、エルサレムは、その中に主御自身が現存される「母である町」すなわち「首都」でした(ゼファニア 3:14-18 参照)。この光のもとで、キリスト教は、その胎の内に受肉したみ言葉を、その結果として再生した神の子どもたちを宿している生きていたシオンとしてマリアについて歌うのです。ミラノのアンブロジウスからアレキサンドリアのアタナシオにいたるまで、証聖者マキシモからダマスコの聖ヨハネにいたるまで、アクイリアのクロマチウスからコンスタンチノーブルのジェルマノスにいたるまで、教会の教父たちの声は、このような詩編 87 のキリスト教的な読み直しについて同じ意見を持っています。

それでは、アルメニアの伝統的な教えに耳を傾けてみることにいたしましょう。ナレクのグレゴリオ(950-1010 年)は、「祝福されたおとめマリアに対する称賛の講話」の中で、マリアに向かって次のように語りかけています。「あなたのいとも尊敬すべき力ある取り成しのもとに避けどころを求めながら、ああ、聖なる神の母よ、私たちは再び生きる力を与えてくれるものを見出しながら、守られ、厳重で堅固な壁によって守られているかのように、あなたの御保護の影に静かに憩います。純粋なダイヤモンドで豪華に飾られた壁よ、襲撃してくる強盗たちも侵入できない火に囲まれた壁よ、輝き、きらめき、近寄りたく、残酷な裏切り者たちも乗り越え得ない、四方を囲む壁よ、ダビドによれば、その土台はいと高き御方によってすえられました(詩編 87:1,5 参照)。天の都の力強い壁よ、パウロによれば、そこでは、あなたがすべての人々をその住民として迎えてくださいます。神によって肉体的に産まれることを通して、あなたは地上のエルサレムの子らを天のエルサレムの子らにして下さるからです(ガラテア 4:26, ヘブライ 12:22 参照)。そこでは、彼らの唇はあなたのおとめの胎を祝福し、あなたが御父と同じ本性を持っておられる御方の住まいにして神殿であるという信仰をすべての人々が告白します。こうして、まさに預言者が語ったことがあなたに当てはまります。『あなたは私たちの逃れ場である家、苦難の日の激流に対する私たちの助け。(詩編 46:2)』(Testi Mariani del primo millenni, IV)」

### 第3週 木曜日 朝課 第2唱和

#### イザヤ 40 章

1, 紀元前 8 世紀に活躍した偉大な預言者イザヤの書には、彼の弟子や後継者である他の預言者の声も含まれています。聖書学者たちが、紀元前 6 世紀に起こったイスラエルのバビロン追放からの帰還について語る預言者を「第 2 イザヤ」と呼んでいるのは、このようなケースの 1 つです。彼の業績は、イザヤ書の 40-55 章を構成しています。ただ今朗読された箇所は、教会が朝の祈りに組み入れた歌で、この第 2 イザヤの中の数節ということになります。

この歌は 2 つの部分から成り立っています。最初の 2 節は、神ご自身に先導されてバビロン追放から帰還したこと(イザヤ 40:1-11 参照)を宣言する慰めに満ちた偉大な祈り



の最後の部分からとられています。続く数節は、神の全知全能、偶像を造る者たちを厳しく咎めることを主題とした護教的な対話を始める形式です。

2, 典礼に用いられている箇所のはじまりには、ちょうど、ヤコブが自分の群れを連れて聖地にもどってきた時のように(創世記 31:17;32:17 参照)、御自分の戦利品を携えてエルサレムに戻ってきた、神の力強い姿が現れています。神の戦利品は支配者たちの手から奪い取った追放されていたヘブライ人たちです。ですから、神は「牧者」(イザヤ 40:11)のように描かれています。しばしば、聖書や他の古い伝統において、このイメージは権威や王職について考えさせますが、ここでは、神の特徴はなによりも優しさと親切さです。この牧者は自分の羊たちの旅路の伴侶でもあるからです(詩編 23 参照)。神は御自分の群を世話していますが、単に食べさせたり道に迷ってしまわないように注意するだけでなく、子羊を引き寄せ、幼い羊を抱きかかえています(イザヤ 41:11 参照)。

3, この場面に王であり牧者である主が入ってこられるのを描写するにあたって、宇宙の創造主としてのみ業についての考察があります。人間はもちろんのこと、ましてや偶像や死すべき有限な存在であれ、誰もこの壮大で膨大なみ業について神に比べるものはありません。それから、預言者はすでに答えを含んでいる対句的な質問の連続を用いています。これらは公の試験のように連発されています。誰も神に比べようはなく、神の偉大な力、その無限の知恵を非難できるものはありません。

誰も、神によって創造された巨大な宇宙を測ることはできません。預言者は、この務めのために人間の道具がどれほど愚かしく無力であるかを私たちに悟らせてくれます。さらに、神は唯一の建築家です。誰も宇宙の創造という巨大なご計画について神を助けることもアドバイスを与えることもありませんでした(イザヤ 40:13-14 参照)。

エルサレムの聖チリロは、彼の洗礼志願者のためのカテキズムの第18講話において、この賛歌をもとに、次のように教えています。私たち人間の限界ある尺度によって神を測ることはできない、と。「惨めで弱いあなた方にとっては、ゴートからインドが、ペルシアからスペインが遠くにあるのです。しかし、ご自分の手のひらの中に全地を握っておられる神にとっては、すべてが近いのです」(Le Catechesi, Rome1993, p. 408)。

4, 被造界における神の全能をたたえた後、預言者は歴史、諸国民、地を覆う人類に対する神の主権を描写しています。すでに知られている地方における住民だけでなく、聖書が遠い島々と呼んでいる遠隔地の人々も、主の偉大さとのかわりにおいては微細な現実には過ぎません。このイメージは印象的で強烈です。諸国の民は「手おけのしずく」、「はかりの上のほこり」、「ちり」(イザヤ 40:15)と比較されているのです。

誰も壮大な主であり王であるお方にふさわしい捧げ物をするにはできないでしょう。地のすべての生贄は足りず、森のすべてのレバノン杉も焼き尽くす捧げ物のための薪として不十分です(イザヤ 40:16 参照)。預言者は、人間に、神の壮大で卓越した全能の前に置かれた人間の限界についての意識をもたらしてくれます。結論は珠玉のようです。「神の前には諸国の民も無にひとしく、すべての人はむなしくはかないもの」(イザヤ 40:17 参照)。

5, 信じる人は、一日の始まりから全能の主を礼拝するために招かれています。4世紀の教会の教父ニッサの聖グレゴリオは次ぎのようにこのイザヤの歌を黙想しています。「私たちが『全能』という言葉を書く時、これについての私たちの概念は、神はあらゆる

る物質的な自然界と同様に、理性をもつすべてのものの存在をその始まりから支えておられるというものです。この理由から、主は地上の円形の上に座しておられ、この理由から、指をのばして天を測り、手のひらで水を測ります。この理由から、神はご自分中で理性をもつすべてのものを理解します。こうして、すべてのものは、神の測る力によって管理されている存在の中で留まっているのです。(Teologia trinitaria 三位一体論, Miran1994)

この箇所について、聖ヒエロニモはもう1つの驚くべき真理の前に驚嘆して立ち止まっています。彼は次のように強調します。キリストは「神の身でありながら…人間の姿で現れ、ご自身を虚しくなさいました」(フィリピ 2:6-7)。全能永遠の神がご自身を小さく滅びうるものとなさったのです。聖ヒエロニモは、ベトレヘムの馬小屋の中のキリストを観想しながら叫びます。「ご自分の握りこぶしの中に全世界を握っておられる御方が、飼葉桶という狭い場所に入っておられるのです」(Lettera 手紙 22, 39 Opera scelte, I, Turin1972, p379)。

### 第3週 木曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 99

1, 「神は王」。詩編 99 は、ただ今私たちが拝聴いたしましたとおり、この歓呼の叫びで始まります。それはこの詩編の基本的な主題であり文学類型です。この詩編は、超越的で卓越した支配によって世界を治めておられる主に対する神の民の高貴な歌です。この詩編は、よく似ている他の賛歌、朝の祈りの典礼が理想的な祈りとして差し出しており、すでに考察してまいりました詩編 95-97 をも、私たちに思い起こさせてくれます。

事実、信者が一日を始めるに当たって、隠された暗闇の運命の意のままにされているとか、自分の自由という不確かさに放っておかれているとか、他の人々の意思に頼るしかないとか、歴史の出来事に支配されている、というわけではないと彼は知っています。創造主であり、偉大さ、聖性、いつくしみによって支配なさる御方が、あらゆる地上的な現実を超えたところにおられるということを、彼は知っているのです。

2, シオンの神殿におけるこの詩編の使用に関して、専門家たちはいくつかの仮説を上げています。いずれにせよ、すべての民と地(詩編 99:1 参照)の前で天の栄光の座についておられる主に捧げる観想的な賛美の性格を与えています。しかし、神はご自分を、「私たちと共におられる神」として示しながら、ある場所、ある共同体のただ中、つまりエルサレムに現存しておられます(詩編 99:2 参照)。

最初の数節で、詩編作者は、神に7つの荘厳な称号を与えています。神は王、偉大、卓越(偉大)、ふるえおののかせる、力ある、聖なる、正義(詩編 99:1-4 参照)。さらに、神は忍耐強い方であることが述べられています(詩編 99:8 参照)。何にもまして、神の聖性に強調点が置かれています。「神は聖なるかた」という言葉が3度も繰り返されています(詩編 99:3, 5, 9)。聖書の用語において、この主題は何よりも、神の超越性を定義するものです。事実、神は私たちより優れており、永遠にご自分のあらゆる被造物の上

におられます。しかし、この超越性は神を遠くにいる冷淡な支配者にするものではありません。神は、呼び求められる時には、答えてくださるのです(詩編 99:6 参照)。神は救うことのできる御方、人類を悪と死から解放することのできる唯一の御方です。事実、神は「正義を現し、ヤコブの中でただしいさばきを行なわれた」のです(詩編 99:4)。

3, 教会の教父たちは、神の近づきがたさを称えながら、神の聖性について長年にわたって考察してきました。しかし、この超越者であられる聖なる神は人類に近づいてくださったのです。聖イグナチオが語っている通り、旧約においてすでに、人間が神について行くこと、従うことを学びながら神に「慣れ親しむ」ようになっていく間に、神も御自分を目に見える姿で示し、預言者たちを通して語りながら、人類と共にいることに「慣れていった」のです。聖エフレムは彼の賛美歌のひとつにおいて、次のように称えています。受肉を通して「聖なるお方がマリアの胎に肉体的な様式でお住みになった。そして、見よ、彼は霊的な様式で心の中にお住みになっているのである」(St Ephrem, *Inni sella Nativita* 御降誕の賛美歌, 4, 130)。さらに、受肉との類比において、御聖体の賜物を通して、「命の薬は天から降られた。ご自分にふさわしい者たちの中に住むために。彼らの中に入られて後、私たちの間に住いを定められた。こうして、彼の内にあって私たちは聖なるものとされた」(*Inni conservati in armwno* アルメニアに残されている賛美歌)。

4, 「聖性」と神の近さとの間の深い絆は、詩編 99 の中でも発展していきます。事実、主の絶対的な完全さを観想した後、詩編作者は、神は常に、ご自分の仲介者であるモーセとアロン、ご自分の預言者であるサムエルを通してご自分の民と触れ合っておられたことを思い起こさせています。神は語り、耳を傾け、逆らうものに罰を与えますが、また、赦しをも与えてくださいました。

ご自分の民の中における神の現存のしるしは、「足台」つまりシオンの神殿の契約の櫃の座です(詩編 99:5-8 参照)。聖にして見ることのできない神は、また、律法の制定者モーセ、祭司アロン、預言者サムエルを通してご自分をご自分の民にとって確かに力あるものとなさいました。神は、救いと裁きのみ言葉とみ業によって御自身を啓示なさいました。神は、神殿で祝われる礼拝によって、シオンに現存なさいました。

神の御子は歴史の中で教会とともにあり、聖にして超越者である神の現存の中心である教会の内に成就している、と言うことができます。主はご自分の神秘の中に引き退いてしまわれることもありませんし、私たちの歴史や期待に無関心でもありません。神は「世界をさばきに来られる。正義と公正をもってすべての民をさばかれる」(詩編 98:9)のです。

何よりも、神は、私たちの内にご自分の命とご自分の聖性を注ぎ込むために私たちの一人となってくださったご自分の御子の内に、私たちの間に来られました。このために、今、私たちは恐れではなく、信頼をもって神に近づくことができます。事実、私たちは、キリストにおいて、聖なる、罪のない、非のうちどころのない大祭司を持っています。キリストは「ご自分を通して神に近づくものすべてを、いつでも救うことがおできになります。なぜなら、彼は常に彼らのために取り成すために生きておられるからです」(ヘブライ 7:25)。こうして、この賛美歌は、落ち着きと喜びに満たされたものとなります。私たちの間に住んでおられる王である主を崇めましょう。この主は私たちの目から涙を

すべて拭い去ってくださるのです(黙示録 21:3-4 参照)。

第3週 金曜日 朝課 第1唱和

詩編 51 3

1, 毎週、朝の祈りはあの有名な Miserere 詩編 51 を繰り返します。他の機会に、ある部分についてはすでに考察いたしました。今回も、この荘厳な赦しの祈願のある箇所—12-16 節—について、特別な方法で考察したいと思います。

何よりもまず、ヘブライ語原典には「霊」という言葉が3度繰り返されているということに注意をはらうことが重要です。「霊」は賜物として神に願い、自分の罪を悔いる人間によって受け取られます。「あなたの霊(いぶき)で私を強め、新たにしてください…あなたの聖なる霊(いぶき)を取り去らないでください…あなたの霊(いぶき)を送って喜び仕える心を支えてください」(詩編 51:12, 13, 14)。典礼用語によれば、これは「epiclesis(聖霊を送ってくださるようにと願う祈願)」、すなわち、創造の時に水の上をただよっていたように、今は、信者の魂に新しい命を注ぎ入れ、罪の王国から恩恵の天国へ信者の魂を引き上げ、信者の魂に染みとおる霊に対する3つの祈願といえましょう。

2, 教会の教父たちは、詩編作者によって願い求められている「霊」の中には、聖霊の効果ある現存があると考えています。ですから、聖アンブロジオは、聖霊を次のような御方であると確信するに至りました。「預言者の内に働き、使徒たちの上に息を吹きこみ、洗礼の秘跡において父と子とひとつに結ばれている」(Lo Spirito Santo I, 4:SEAMO 16, p. 95)御方である。エジプトのアレキサンドリアの盲人ディディモス、カイサリアのバジリオ等のほかの教父たちの尊敬に値する作品の中でも、同じ確信が表明されています(Didymus the Blind:Lo Spirito Santo, Rome1990, p59; Basil Caesarea, Lo Spirito Santo, X24, Rome1993)。

聖アンブロジオは、詩編作者が、ひとたび神の寛大で力強い霊を受けた魂に浸透する喜びについて語っていることに注目しながら、次のように解説しています。「喜びと楽しみは霊の結ぶ実であり、私たちの基礎が置かれているのはこの御方、すなわち主権者であられる霊の上なのです。こうして、主権者であられる霊によって命へと運ばれた者は誰であれ、奴隷のくびきに服してはいません。罪によって支配されてはいません。優柔不断ではありません。あちらこちらへとさ迷い歩いたりしません。選択において不確かな者ではありません。岩の上に立っています。彼は揺らぐことのない足でしっかりと立っています(Apologia del David a Teodosio Augusto(皇帝テオドシアのための預言者ダビデについての擁護), 15, 72:SEAM05, 129)。

3, この詩編 51 は、「霊」に関する3つの考察によって、その前の数節で罪の暗い牢獄について述べた後、恩恵という明るい領域を展開します。これは、新しい創造と比較されている重要な転換点です。初めに、物質にご自分の霊を吹き込むことによって、神が人間を創造されたように(創世記 2:7 参照)、今、同じ神の霊は、悔い改める罪人を再創

造し(詩編 51:12 参照)、刷新し、変容し、造り替え、救いの喜びに預かせながら(詩編 51:14 参照)、再び彼を抱きます(詩編 51:13 参照)。他の詩編において「あなたはわたしの神、み旨を行なうことを教えてください。あなたのいつくしみ‘深い霊’によって、正しい道に導いてください」(詩編 143:10)とされている通り、人間は神の霊によって動かされて、今、正義と愛の小道に踏み出します。

4, このように内的に再び誕生する体験をしながら、ここで祈っている人は、一人の証人となります。彼は神に、罪人にあなたのいつくしみの道を教えます(詩編 51:15 参照)、そうすれば、罪人たちは放蕩息子のように、御父の家に帰ることができるでしょう、という約束をします。同じ方法で、聖アウグスチヌスは、罪の暗い道をいくつも体験した後、自分の「告白」によって、救いの自由と喜びの証しをする必要性を感じたのです。

神のいつくしみ深い愛を体験した人なら誰でも、このいつくしみの情熱的な証人となります。特に未だ罪の網に囚われたままでいる人々に対してそうです。パウロについて考えて見ましょう。ダマスコへの途上でキリストによって照らされ、神の恵みの熱烈な使徒となりました。

5, 最後に、祈っている人は自分の暗い過去をみつめ、神に向かって叫んでいます。「神よ、わたしの救いの神よ、血なまぐさい罪からわたしを解放してください」(NAB 版詩編 51:16) (「神よ、あなたはわたしの救い。死の嘆きからわたしを助け出し」)。この人は、「血」という、聖書において様々に翻訳されている言葉に言及しています。この箇所を、ダビデ王の唇にのせるなら、それは、王の情熱の対象となった女性バテシバの夫ウリアの殺害についての言及となります。より一般的な意味においては、この祈願は、暗い悪の力によって人間の心に常に存在している悪、暴力、憎しみから清めていただきたいという願いを指していることとなります。今、罪から清められた信じる人の唇は主に向かって賛美を歌うのです。

事実、私たちが解説してきた、詩編 51 の数節は、神の「正義」を宣言する約束によって終わっています。この流れの中で、「正義」というテーマは、たびたび聖書で用いられるように、神によってなされる悪に対する罰としての神の行為を示しているのではなく、むしろ、神は罪人を義とすることによってご自分の正義を表されるのですから(ローマ 3:26 参照)、罪人の回復を指していることとなります。神は罪人の死によってではなく、かえって罪人がその態度と生き方を改めることによって喜ばれるのです(エゼキエル 18:23 参照)。

### 第3週 金曜日 第2唱和

#### エレミア 14 章

親愛なる兄弟姉妹の皆さま

1, 預言者エレミアは彼自身がおかれていた歴史的状況においてつらく深みのある切実な歌を天に向かって立ち昇らせました(14:17-21)。ちょうど今日、主の死を記念しているこの日、金曜日の朝の祈りの祈願として唱えられたこの歌を私たちは拝聴したばかり

りです。この哀歌が立ち昇った状況は、中東の国をしばしば打ちのめす早魃という苦難を描き出しています。しかし、預言者は、この自然災害と共にもうひとつ、同じくらいぞっとするような戦争の悲劇をも織り込んでいます。「野には、剣で刺し殺された者がいる。町には、飢えに苦しむ者がいる」。不幸にも、私たちの惑星のあまりにも多くの地方では、このような悲劇的なことが今も起こっています。

2, エレミアは、涙にぬれた顔で場面に登場してきます。エルサレムという名の「彼の民である娘」ために絶え間なく涙を流しています。この街は、良く知られている聖書的象徴ですが、「シオンの娘」という女性のイメージによって描かれます。預言者は自分の民の「大きな破壊」と「信じがたい傷」に親しく分け与っているのです(14:17 参照)。しばしば、彼の言葉は悲しみと涙によって特徴付けられます。イスラエルは苦しみがもたらす神秘的なメッセージに巻き込まれようとしなからずです。他の箇所でも、エレミアは叫んでいます。「あなたが傲慢のゆえにこれを聞き入れないならば、私は隠れたところで涙を流す。私の目は捕らえられて行く主の群れのために涙を流す」(エレミア 13:17)。

3, 預言者の胸の張り裂けるような祈りの理由は、すでに述べられたとおり、2つの悲劇的な出来事の中に見出されます。剣と飢え。つまり、戦争と飢饉です(エレミア 14:18 参照)。この苦しい歴史的状況のゆえに、主のみ言葉の守り手である預言者や祭司が心乱して地をさ迷い、打ちひしがれている姿が描写されています。

この歌の第2の部分(エレミア 14:19-21)は、初めの部分の一人の人の個人的な哀歌ではなく、神に対して述べられている共同体としての嘆願となっています。「何故あなたは私たちに打たれたのか。あなたが打たれたのなら、何故癒してくださらないのか」(エレミア 14:19)。事実、剣と飢えに加えて、これ以上ご自身を現してくださらないおつもりで、人間の業を隠れ蓑にして、ご自分では天に引き退いてしまったかのように見える、神の沈黙というより大きな悲劇がそこにはあるのです。神に向かってなされる問い掛けには、はりつめた緊張感があり、典型的な宗教的感覚の内に明らかにされています。「あなたはユダを打ち捨てられたのか?」あるいは、「あなたの心はシオンから離れたのか?」(エレミア 14:19)。今、彼らは孤独で見捨てられたと感じています。民は置き去りにされ、孤立し、恐怖によって打ち負かされてしまったかのように感じています。

このような存在に関する孤独は、今日の私たちも耐え忍んでいるあらゆる不満の深い原因ではないのでしょうか。これほどの不安、これほどの無思慮は、私たちが、私たちの救いの岩である神を捨ててしまったことに由来するのです。

4, 今、転換点が訪れます。民は神に立ち返り、神に向かって熱烈な祈りが立ち昇ります。何にもまして、自分たちの一時の罪を認識しますが、心をこめてその悪を告白します。「神よ、確かにわたしたちはあなたに罪を犯している」(エレミア 14:20)。このように、神の沈黙は人間の拒絶によって引き起こされたのです。もし、民が回心して主に立ちもどるなら、神は彼らに出会い抱きしめるために、御自分の方から出て行く用意のあることを示してください。

最後に、預言者は2つの基本的な言葉を用いています。「記憶」と「契約」です(エレミア 14:21 参照)。神は「思い起こしてくださるように」と民によって願われています。すなわち、過去においてたびたびご自分の民を救うために決定的な介入によって示してくださったことのある寛大なご親切の態度に戻ってくださるように、と。神は、忠実と

愛の契約によってご自分をその民に結びつけたことを思い出してくださるよう、と願われているのです。この契約のゆえに、民は、自分たちを解放し救うために主が介入してくださるということを確信することができます。神が請け負ってくださった約束、ご自分の「み名」の誉れ、神が「ご自分の栄光の座」である神殿に現存して下さっているという事実は、裁きと沈黙の後で、ふたたび命、平和、喜びを与えるためにご自分の民に近づいてくださるようにと無理にでも神を駆り立てます。

イスラエルの人々と共に、私たちもまた、主はいつくしみのゆえに私たちを見捨てることなく、あらゆる清めのための試練の後、立ちもどって、民数記に述べられている司祭的祝福として「主がそのみ顔を向けて私たちを照らし、…恵みを与え…平和を与えて」（民数記6:25-26）くださることを確信することができます。

5, 結びとして、3世紀のカルタゴの司教チプリアヌスはその町のキリスト者たちに向かって行なった講話をエレミアの嘆願に合わせたいと思います。この迫害の時代に、主に懇願するよう信者たちに熱心に勧めています。迫害は罪の罰というより、キリストの御受難への参与ですから、罪の告白を含んではいませんので、この祈りは、預言者の祈願と一致してはいませんが、それにもかかわらず、エレミアの祈りにまさるともおとらない切迫した願いとなっています。聖チプリアヌスは次のように書いています。「私たちがなすべきことは、自分たちが、倒れた人々の嘆きと、弱り果て残酷に扱われて倒れている人々の群のただ中であって、まだ生き残っている人々と、しっかりと立っている人々の小さな群の恐れのただ中に見出している人々にふさわしく、涙と叫びをもって主をなだめようとしながら、一致して分かつたことのない心で、絶え間なく願いつつ、主が受け入れてくださるという確信をもって、主に乞い求めることです。私たちが願うべきことは、すみやかに平和が立て直されることと、私たちの隠れ家や危険な場所にすみやかに助けが差し伸べられること、主がご自分のしもべたちに示して下さったこと、すなわち主の教会の再建、私たちの救いの確証、雨の後に晴れた空、闇の後に光、激しい嵐の後に穏やかな落ち着きが成就されるように、ということです。御父がご自分の子どもたちに愛深い助けを送ってくださるよう、また神がそのご威光の内にたびたび行なってこられたように、素晴らしいみ業を、今、現してくださるようにと懇願しなければなりません」（Letter 11, 8, カルタゴのチプリアヌス書簡 第一巻 p. 80, Newman Press, Ramsay, N. J. 1984）。

### 第3週 金曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 100

1, クリスマスの最後の一週間に続く喜びと祝いの精神をもって、朝の祈りの黙想を再開したいと思います。今日は、ただ今朗読された、ご自分の民の牧者である主への賛美へと喜びに満ちて招く詩編 100 について、考察いたしましょう。

この詩編全体にわたって、7度の命令が出され、愛と契約の神を祝し、礼拝するようにと信じる者たちの共同体に向かって呼びかけています。喜びの声をあげ、仕え、み前

に進み、悟れ、門をくぐり、賛美を歌って、たたえよう。この人は、主への誉れをもって儀式を執行するためにシオンの神殿に入っていく典礼の行列について考えています。(詩編 14:23;94 参照)。

この詩編において、特徴的な主題が、神とイスラエルの間には存在する契約の絆を称揚するために繰り返されています。そこには、何にもまして、完全に神のものであるという断言が現れています。「私たちは神のもの、その民」(詩編 100:3)。それは、イスラエルは「その牧場の羊」(同上)として描かれていることから、誇りと謙遜との両方に満ちている断言です。後日、私たちはこれに関する表現を見出すことになります。「神はわたしたちの神」(詩編 95:7)。こうして、私たちは、神の「善性」に結びついている愛の関係、神の「いつくしみ」と「忠実」の豊かさを見出すのです。これらの言葉は、原語のヘブライ語ではイスラエルが彼女の神と結んだ契約についての典型的な用語です。

2, 空間と時間が同時に展開されていきます。事実、一方では、全地が神への賛美に合流しながら私たちの前に現れます。それから、地平線はエルサレムの中庭と門によって神殿の聖所へと移っていきます(詩編 100:4 参照)。そこには、共同体が祈りの内に集まっています。他方では、3つの基本的な次元における時間に関する考察がなされています。創造という過去(「主こそ神であると悟れ。神は私たちを造られた」(詩編 100:3 参照))、契約と礼拝という現在(「私たちは神のもの、その民、その牧場の羊」(同上))、最後に主のいつくしみ深い忠実さが「永遠」であることを表す「代々に」(詩編 100:5) およぶという未来です。

3, 神の親密さと意味深い神認識を観想している最後の節の中に神を称揚する動機を見出す前に、今しばらく、賛美するよという長い招き構成している7つの命令について考察してから詩編全体(詩編 100:2-4)を取り上げることにいたしましょう。

最初の訴えは、創造主に向けられている賛美の歌に全地を巻き込む祝いの歓呼に関するものです。私たちが祈るとき、異なる言語や方法によって一人の主を称揚しながら祈るすべての人々と響きを合わせていることを感じるべきです。預言者マラキが言うように、「日の日ぼるところから日の沈むところまで、私の名は崇められ、あらゆる場所で私の名に香が捧げられいたるところで私の名に生贄が捧げられ清い供え物が捧げられる。私の名が諸国で崇められるためである。万軍の主のお告げ」(マラキ 1:11)。

4, それから、典礼と儀式の用語を用いながらいくつかの招きがあります。「み前に進み」、「仕える」、神殿の「門をくぐり」。これらは、王の一族について言及しており、共同体の祈りにあずかるためにシオンの聖所に入っていくときに、彼らが行なう様々な行為を描写しています。この宇宙的な賛歌の後で、神の「牧場の羊」、「諸国の中にあつて神のもの」(出エジプト 19:5)である神の民によって、典礼が祝われます。

「感謝に満ちて門をくぐり」と「賛美を歌って中庭にはいる」という招きは、聖アンブロジウスが洗礼を受けた人々が祭壇に近づく時のことについて書いている「秘儀について」の箇所を思い出させてくれます。「清められた人々は、『私の若さに喜びを与えてくださる神の祭壇のもとに行きます』(詩編 43:4 ヴルガタ訳)といいながら、キリストの祭壇へと急ぎます。過去の過ちの汚れを脱ぎ捨てた人々は驚のようにその若さを新たにされ、天の宴へと急ぐのです。こうしてやってきた彼らは、きちんと整えられた聖なる祭壇を見て叫ぶのです。『あなたはわたしのために会食をととのえ』てくださった。



ダビデは次のように言いながら、これらの人々を案内します。『主はわたしの牧者、私は乏しいことがない。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水辺に伴われる。主は私を顧みられ、そのいつくしみによって正しい道に導かれる』(詩編 23:1-2)」(聖アンブロジーオ Theological and Dogmatic Works, 神学及び教義業書 p. 20-21, CUA Press, 1963)。

5, この詩編を豊かなものにしてしている他の幾つかの命令は祈るときに人がとるべき基本的な宗教的態度を繰り返しています。悟れ、賛美せよ、たたえよ。悟れという動詞は唯一の神への信仰の表明の内容を表現しています。事実、私たちは、あらゆる偶像、傲慢、自分を虐げている人間の力と戦いながら、ただ「主こそ神である」(詩編 100:3)と宣言しなければなりません。賛美せよ、たたえよ、という他の動詞が対象としているのも、主の「名」(詩編 100:4)、あるいはその人柄、力をもって救ってくださる現存です。

この光の中で、この詩編は最後には、一種の信仰宣言となる神への荘厳な称揚へと導きます。主はいつくしみ深く、そのいつくしみ深い愛によって、常に私たちを支えようと準備しておられますから、その忠実さのゆえに決して私たちを見捨てることはなさいません。この確信をもって、ここで祈っている人は彼の神の抱擁に自らを明け渡します。

「味わい見よ、主のいつくしみを。」そして、詩編作者は語ります。「主に避けどころを見出す人は幸い」(詩編 33:9; I ペトロ 2:3 参照)。

### 第3週 土曜日 朝課 第1唱和

#### 詩編 119:145-152

1, 朝の祈りが差し出す詩編をたどる私たちの旅もずいぶん長いものとなり、はつきりとしたひとつの区切りにやってきました。詩編の中でもっとも長い祈りである詩編 119 です。大きなアルファベットの祈りの一部分で、第 19 編にあたる部分です。詩編作者はその作品を 22 に区切っています。ヘブライ語の 22 のアルファベットの文字順に対応しています。各区切りは 8 つの節を持っており、各節の最初の文字はアルファベット順になっています。

ただ今私たちが拝聴いたしましたのは、神への信仰と祈りの熱心な生活を表現している祈る人を描く、‘qôf’ というヘブライ語の文字で始まることによってしるしを付けられている区切りの部分です(詩編 119:145-152 参照)。

2, 主への嘆願は休みなく続きます。なぜなら、神のみ言葉についての普遍の教えに対する応答であるからです。事実、一方では、この祈りの中で用いられている動詞は、増えていきます。「心をこめて叫ぶ」、「あなたに叫ぶ」、「呼び求める」「答えてください」。一方では、詩編作者は、神のおきて、さとし、ことば、希望、さばき、仰せ、教え、すすめを差し出してくれる主のみ言葉を称揚します。これらすべてが一緒になって、詩編作者の信仰と確信にとって方角を示す目印となる北極星を形作っているかのようです。祈りは、夜明けの最初のほのかな光を前にした夜に始まる対話のように表され(詩編 119:147 参照)、日中、特に生活の中の逆境、試練の時にも続きます。事実、地平線は闇と嵐です。「悪意に満ちて私を襲う者が来る。彼らはあなたの教えから離れている」(詩

編 119:150)。しかし祈っている人は確信に満ちています。神が、み言葉と恵みをもってそばにおられるのです。「神よ、あなたは私の近くにおられ」(詩編 119:151)、迫害者の手に義人を売り渡すようなことはなさいません。

3, ここで私たちの黙想を、詩編 119 のこの部分の単純ではあっても鋭いメッセージ、それは一日の始まりのために役立つメッセージですが、その概略を示しながら、この詩編 119 について解説している偉大な教会の教父聖アンブロジウスへと、向かわせたいと思います。彼は今拝聴した箇所解説に 44 もの段落を捧げています。

朝早くから神を賛美して歌うようにという理想的な招きを取り上げながら、特に 147-148 節について考察しています。「あかつきに目覚めて、わたしは呼び求める。…夜回りの来る前に、わたしは目覚めている。」詩編作者のこの熱心な言葉から、聖アンブロジウスは一日のすべての時間を包含する絶え間ない祈りについての考えを悟ります。「主を呼び求めるものは誰でも、主に嘆願するために捧げられた特別な時間というもの存在を知らないかのように生活すべきです。常に、祈り求める態度の内に留まるのです。食べたり飲んだりしていても、キリストを呼び求め、キリストに祈り、キリストについて語りましょう。どうかキリストがいつでも私たちの心と唇にいてくださいますように」(詩編 119 の解説, 2:SEAM010, p. 297)。

聖アンブロジウスは、朝の特定の時間について語る幾つかの節に注目してから、私たちは「日の昇る前に主に感謝を捧げる」(知恵 16:28) べきであるという知恵の書の指示に言及しながら、次のように解説します。「もし昇る朝日の光線が傲慢な軽率さによって怠慢にもベッドの中に横になっているあなたを驚かせるなら、また、もしさらに明るい光が惰眠をむさぼるあなたの寝ぼけ眼を傷つけたなら、大変なことです。すべきことのない夜の間、わずかな信心業さえもしないまま、霊的な捧げ物もなしに、それほど長い時間を過ごすことは私たちにとって不名誉なことです」(同上 p. 303)。

4, それから、聖アンブロジウスは、時課の典礼に含まれている彼の有名な賛美歌のひとつ「夜明けの時に」Aeterne rerum conditor にあるとおりに、昇る朝日を観想しながら、次のように私たちに勧告しています。「人よ、おそらく知らないのでしょうか。毎日、あなた方の心と声の最初の実りを神に捧げなければならないということ。毎日が収穫の時なのです。ですから、昇る朝日にお会いするために走りなさい。…義の太陽は、楽しみに待っていてもらうことを望んでおられます。それ以外に何も期待しておられません。太陽よりも早く起きるなら、あなたの光としてキリストを受けましょう。彼ご自身こそは、あなたの心の深みを照らす最初の光なのです。あなたが神のみ言葉について黙想するなら、夜明けの光をお作りになる御方は、夜の時間にあなたを照らして下さるでしょう。黙想している間に光が上るのです。朝早く、急いで、あなたの信心の最初の実りを尊敬をもって教会へと運びなさい。それから、世の思い煩いがあなたを呼ぶなら、次のように言うことに何も優先させてはなりません。『あなたの仰せを思い巡らし、夜回りの来る前に私は目覚めている』。そうすれば、あなたは良い意向をもって、あなたの思い煩いに携わることになります。たくさんの賛美歌と歌、福音で読んだ幸いの数々によって一日を始めることは、何と美しいのでしょうか。神の祝福にふさわしいことを感じさせてくれるものを自分の内に保とうとするなら、主のみ言葉が、祝福となってあなたの上に降り、あなたが歌ったとおりに、主の祝福を繰り返し、徳を実行する必要

性に留まらせてくれるとは、なんと頼もしいのでしょうか」(同上 p. 303, 309, 311, 313)。

さあ、聖アンブロジウスの呼びかけに答え、朝ごとに、神が私たちのそばにいて、落ち着きと恵みを保障してくださるそのみ言葉によって私たちを導いてくださるようにと呼び求めながら、日々の生活、その喜びや心配事に向かって目覚めるようにいたしましょう。

### 第3週 土曜日 朝課 第2唱和

#### 知恵 9:1-6, 9-11

1, ただ今私たちが拝聴いたしました歌は、聖書の伝統によれば、卓越した正義と知恵の王と考えられていたソロモンの唇に帰されている長い祈りの大きな部分です。これは、おそらくキリスト教時代の曙にエジプトのアレキサンドリアで、ギリシア語で書かれた旧約聖書の作品である知恵の書の9章の中で私たちに差し出されているものです。私たちは、その中に、ヘレニズム文化圏に寄留しているユダヤ人の生き生きとした解放的なユダヤ主義の響きを読み取ることができます。

この書は私たちに3つの神学的考察の流れを差し出しています。義人の生涯にとっての最終的な目的である祝福された不死性(知恵1-5章)、神の賜物、人生の道しるべ、信じる者の解決としての知恵(知恵6-9章)、救いの歴史、特に、完全な救いと解放へと導く善と悪との戦いのしるしとしてのエジプト人の圧制からの脱出という基礎となるできごと(知恵10-19章)。

2, ソロモンは知恵の書の靈感を受けた著者よりも10世紀前に生きましたが、後代の霊的著作家たちすべての基礎であり理想と見なされてきました。彼の唇に帰されている賛美歌の形式のこの祈りは、知恵という尊い賜物をお恵みくださるようにと「先祖の神、あわれみ深い主」(知恵9:1)に向かって捧げられた荘厳な祈願です。

ここでは、ソロモンが自分の統治の初めに当たり、聖所の置かれていたギベオンの高台に登ったという列王記上の中で報告されている場面を明らかに示唆しています。荘厳な生贄の儀式の後、夜の幻の中で彼は啓示を受けます。賜物を求めるようにと招く神ご自身の願いに対して彼は次のように答えました。「あなたのしもべに、あなたの民を裁き、誤りと真実とを見分けるための理解する心をお与えください」(列王記上3:9)。

3, この歌は、ソロモンの祈りによって始まり、知恵というかけがえのない宝をお恵みくださるようという主への嘆願の連続へと発展していきます。

朝の祈りによって差し出されている箇所には、2つの祈りがあります。「知恵を私に与え、…天から知恵をつかわし、栄光の座から知恵を送ってください」(知恵9:4, 10)。この賜物なしには、生活の中の倫理的選択において私たちを導いてくれる指標がないかのように、導きを欠いているということに気づかされます。「私は弱く、はかない者、さばきと律法にくらい。…あなたの知恵を欠いているならむなしい」(知恵9:5-6)。

この「知恵」が単なる知識や実践的な能力ではなく、むしろ「知恵をもって人を造」(知恵9:2)られた神のお考えに与ることであると悟るのはたやすいことです。つまり、

それは、主によって意図された究極の意味を発見するために物事の表面を越えて進み、存在、命、歴史の深い意味を透かし見る能力のことなのです。

4, 知恵とは、日々の生活の倫理的選択を照らし、「なにがあなたの心をよろこばせ、なにがおきてにかなうかを知」(知恵 9:9) するための小道へと私たちを導いてくれる灯火なのです。この理由から、典礼は一日の始まりに知恵の書の言葉を私たちに祈らせてくれます。こうして、神が、善と悪、正義と不正を私たちに示しながら、ご自分の知恵と共に私たちのそばにいて、(日々の)喧騒の中で「わたしの行いを正しく導き、その力で私を守」(知恵 9:10) ってくださいることでしょう。

神の知恵と手をつなぎ、確信に満ちてこの世界へと出かけていきましょう。知恵の書によれば、「私の若いときから、私は知恵を愛し求めてきた。私は知恵を私の花嫁とし、彼女の美しさに心奪われた」(知恵 8:2) と告白したといわれているソロモンに倣って、私たちも浄配の愛をもって彼女を愛しながら、彼女にしっかりと寄り添いましょう。

教会の教父たちは、キリストを「神の力、神の知恵」(I コリント 1:24) と定義づけた聖パウロに倣って、キリストを神の知恵として認識していました。

聖アンブロジウスがキリストに向かって捧げた祈りをもって終わることにいたしましょう。「あなたは知恵でありますから、豊かに知恵の言葉を教えてください。聖書を開かれたお方よ、私の心を開いてください。あなたは扉でいらっしゃいますから、天の扉を開いてください。あなたを通して入れていただけるのでしたら、永遠のみ国を所有することでしょう。真理の住まいに入る者は間違ふことができませんから、あなたを通して入る者は誰であれ、拒まれることはないでしょう」(詩編 119 についての解説, SEAMO 9, p. 377)。

### 第3週 土曜日 朝課 第3唱和

#### 詩編 117

1, 朝の祈りのテキストをたどる私たちの黙想を続けながら、すでに一度出会ったことのある詩編についてもう一度考えてみましょう。詩編 117 です。ただ今拝聴いたしましたこの詩編は、主に対する普遍的な賛美となった短い賛美歌あるいは熱い望みです。契約によって生じた、愛とまこと(詩編 117:2 参照) という 2 つの基本的な言葉によって表現されている宣言です。

これらの主題によって、詩編作者は、主とみ民との間の深く忠実で信頼に満ちた関係を強調しながら、神とイスラエルの間の体系的な契約を描写しています。神がモーセにお現れになって、シナイ山で語られた時の言葉の響きを、私たちは耳にしているのです。

2, その短さと簡潔さにも関わらず、詩編 117 は祈りの本質を捉えています。それは、共に来て神との生き生きとした個人的な対話に入ることに関わることです。このようなできごとの内に、神の神秘は忠実さと愛として表されます。

詩編作者は祈りの特別な側面を付け加えています。祈りの体験はこの世界の中に輝かされるべきであり、私たちの信仰を共にしていない人々にとっての証しとなるはずであ

る、ということです。実際、この詩編は「すべての民」と「すべての国」(詩編 117:1 参照)を包む広大な地平線によって始まっています。こうして、信仰の美しさと喜びを前にした彼らもまた、神を知り、出会い、賛美したいという憧れによって圧倒されることでしょう。

3, 聖なるものの消滅によって脅かされている技術の世界、確かな自己満足の中で楽しんでいる社会にあって、ここで祈っている人の証しは暗闇に輝く一筋の光線のようなものです。

特に、少なくとも好奇心を呼び起こすことができます。そうすれば、考え深い人々を祈りの意味についての不思議へと呼びさまし、ついには、体験してみたいという大きくなっていく憧れを引き起こすこともできます。この理由から、祈りは、決して日の目をみることはないものですが、全世界を巻き込むほど広大に広がりゆくものなのです。

4, 4 世紀に活躍した東方教会の偉大な教父、シリア人聖エフレムの言葉を詩編 117 に合わせることにいたしましょう。彼の信仰についての賛美歌のひとつ、第 14 番において、彼は「(神の)真理を理解しているすべての人」に呼びかけながら、絶え間なく神を賛美したいという憧れを表現しています。彼の証しは次のようなものです。「主よ、あなたを賛美するために、どうして私の豎琴を絶やすことができましょう。私の舌に不忠実を教えることができましょうか。あなたの愛は私の当惑に確信を与えてくださいました。それなのに、私の意志はまだ感謝が足りません(第 9 節)。」

「人があなたの神性を認識すべきであるのは正しいことです。天に存在しているものたちにとってあなたの人間性を賛美することは正しいことです。天に存在しているものたちはあなたがどれほどご自分を虚しくなさったかを見て、地上に存在しているものたちはあなたがどれ程高く上げられたかを見て、驚かされたのです」(第 10 節:L' Alpa dello Spirito「聖霊の豎琴」, Rome 1999, pp. 26-28)。

5, もう 1 つの賛美歌(Nisibis についての賛歌, 50)では、聖エフレムは、絶え間ない賛美という自分の務めを確信し、ちょうどこの詩編が示唆している通り、神の愛とあわれみ深さの中にその理由を見出しています。

「主よ、あなたの内において、私の口が沈黙から生じる賛美をお捧げしますように。私たちの口が賛美に欠けることがありませんように。私たちの唇が告白に欠けることがありませんように。あなたへの賛美が私たちの中で打ち震えますように」(第 2 節)。

「私たちの信仰の根である主に対して感謝に満ちあふれています。主は遠くに立ち去られながら、愛の融合においては近い。私たちの愛の根が主にしっかりと固められ、あふれるほどの主のあわれみが私たちの上に注がれますように」(第 6 節:同上, pp77-80)。